ISSN 1343-5930

平成10年2月1日発行
第4巻第2号・通巻31号
(毎月1回1日発行)
平成8年10月31日第3種郵便物認可

子どもの発達と教育

EIKOH No.31

1998 february

エデュ・ケア21

2

特集:
いま、なぜ「心の教育」か—
家族と幼保現場が問われるもの

創造性、積極性を養う遊具的施設・ゲート棟

遊具が直接取りつけられたゲート棟

子どもたちが輝く
保育と施設の
ハーモニー⑰

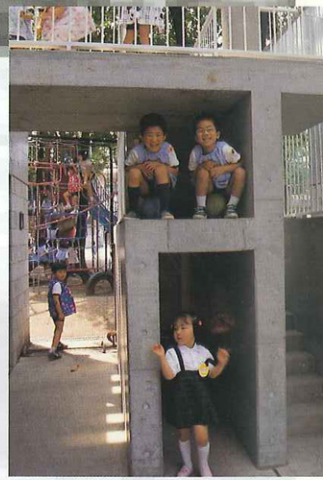
東京都　多摩川幼稚園

非常用にも使える

ゲート棟外観

バス乗り場へのブリッジ

バス乗り場の中にも遊具がある



バス乗り場、小さな空間は秘密の場所だ

総合遊具と子どもたちとのつき合いを見守りたい

長谷川安年　多摩川幼稚園園長

子どもの遊びは常に自発的に、創造性を養い、考えて行動することを身につける訓練となる。

チャレンジして達成した遊びは、能力開発と積極性を育成するうえで大きな力となる。

本館に滑り台やクライミング等の遊具施設を連結することでどこにもない総合遊具が完成した。子どもたちがどのようにつき合っていくか興味深く見守りたい。

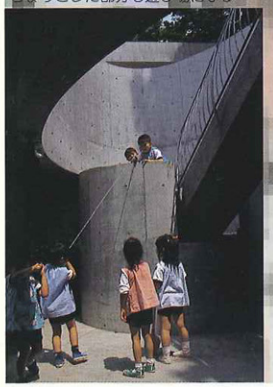
"何々的"を避けた建築

渡辺 治　渡辺 治建築都市設計事務所

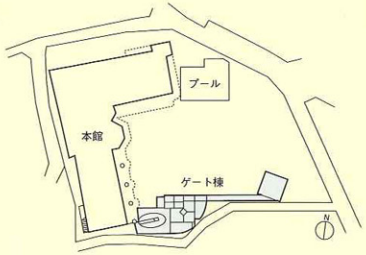
通路であるが、観客席でもあり、階段であるが、座るところでもある。ゲートであるが、家でもある。ここにある要素は、何々的であることを避けてある。それは、各要素を何かのためという既成の単一的な目的のために作らないことでもある。そうした操作は、各々の要素の使用を限定しない。しかし、何もかもは許容しない。そこから創造性を喚起させるきっかけとなることを期待している。ここでは、子どもは登っては走り、あたかも流れる水のようであり、あちこちにあるアルコーブには子どもが淀み、多様な行為の場となる。子どもの流れを決定づけているのは、滑り台で、二階にいろいろな方法で登っては、滑り台で降りる。そのためにある一定の流れが作りだされる。

満艦飾に塗られた遊具が並び出したのはいつからか。すこし昔の子どもはそんなものがなくとも、多分今よりも豊かに遊んでいたのではないか。与えられるのではなく、自分で生み出す遊び。子どもたちにこの建物はどのように映るのだろうか。

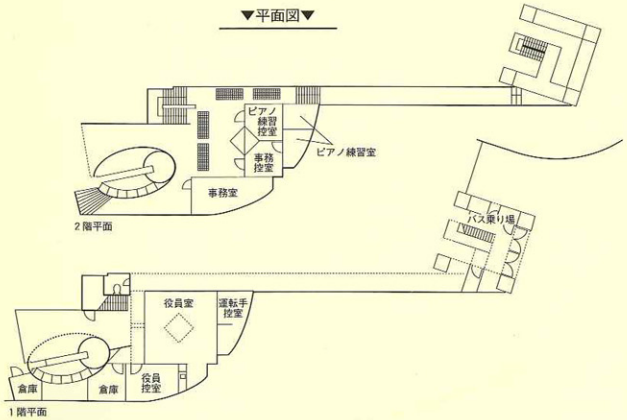
ちょっとした部分も遊び場になる



▼全体図▼



▼平面図▼

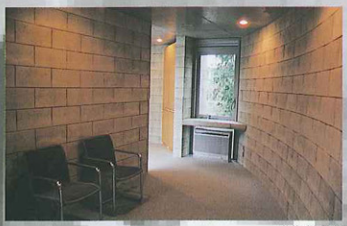


▼工事概要▼

所在地	東京都あきる野市雨間430番地 TEL 0425-58-0218・4867 FAX 0425-50-2467	延床面積	175.73㎡
設計	渡辺 治建築都市設計事務所	構造	コンクリートブロック造
敷地面積	3,260.47㎡	工期	1993年10月～1994年4月
		階数	地上2階

1階滑り台の脇、
天井があるので雨天でも遊べる

トップライトのついた役員室
机といすは頑丈なドイツ製



2階事務室

2階から1階につながる滑り台

木々に囲まれたバス乗り場

写真　渡辺 治建築都市設計事務所

子どもと建築との対話から触発される行動

高橋鷹志・東京大学名誉教授
「子どものための建築学研究会」

今回登場するのは幼稚園本体ではなく、一般に付属施設と呼ばれる建築です。しかし、この場所は単なる付属という以上の役割を果たしています。保育室のある本館から雨に濡れずにバス乗り場まで歩いて行けること、役員や親たちの会議や待合い、あるいはピアノの練習や遊戯のための空間を設けることが設計の要件でした。

これを常套的方法で建築化すると本館からバス乗り場までの「渡り廊下」、その途中の「管理棟」、渡り廊下終点のバス停の「差し掛け小屋」という具合になるでしょう。写真や図面でお分かりのように設計者はそのような常識的なものを超えた答えを用意したのです。

バス乗り場は幼稚園と街との接点を明示する象徴的な門として構想されました。渡り廊下と付属棟とは既存の遊具と関係をもった大きな遊具（その中に必要な諸室が取り込まれています）であり、本館の非常時の避難用を兼ねていた滑り台を中心とする立体的な通路でもあります。

園長先生の「多くの友だちと遊びをとおして社会生活に必要な規則や生活慣習、判断力、知識など、立派なおとなとして成長するために必要なさまざまなことを学んでいくのです」という保育の理念に応えた設計者のデザイン力がこのような物理的環境をつくりだしたといえるでしょう。

子どもたちはこのような設計過程があったことを知らないにもかかわらず、この場所に触れることによって、瞬時に建築との対話を始め、おとなたちの意図を超えて、自由奔放に振る舞っています。この場所は各自の物理的・社会的環境の原風景となるはずです。